



## Contents

- ・【巻頭エッセー】 高等遊民の至福／悪夢 … 松岡新一郎 ●表紙
- ・【研究発表会】 現代の音楽文化 ●2～3
- ・ Question box⑩ … 樋口真規子 ●4
- ・ 新 OPAC 活用術! その2 … 森岡倫子 ●5
- ・ 風景の中で③ … 図書館長 井上郷子 / 資料の部屋③ … 高田涼子 ●6
- ・ 【私のおすすめ】 … 高德眞理 高河誠太郎 ●7
- ・ Information ●8

# Parlando

はるらんど 「語りかけるように歌う」という意味の楽想記号です

No. 305

## 【巻頭エッセー】 高等遊民の至福／悪夢

松岡新一郎

若者にありがちな一過性の熱病かどうか、どのような遊びにも職業にも興味が持てず、頻繁に宿所を変えたり、犯罪に関する書物を読み耽った末、結局は掏摸の気分で金持ちを尾行したり、女装して人を驚かすのがせいぜい、真似事は真似事、そうした遊びにも飽いてしまう。ところが、幸か不幸か、新たに入居した新築の下宿で、押し入れの天井に隙間を見つけ、そこから入り込んだ屋根裏を伝い歩きながら、他の下宿人たちの生活を窺視する快樂を見出す。そしてある事情から一人の男を殺害するに至るのであった。

言うまでもなく、これはわたし自身の体験ではなく、江戸川乱歩が大正14年、『新青年』に発表した「屋根裏の散歩者」の要約に過ぎない。よってわたしは、あまりにも急速に開花した大正時代の様々な媒体（ラジオ放送、レコード、自動車や電車の音、新聞、雑誌に掲載される写真など）が視覚や聴覚に絶え間なく与える刺激により、自らの身体と他者のそれとの距離感の知覚、さらにはそれらが不快感をもたらそうと制御することすらかなわぬという緊張感から逃れるべく、戸締りのある部屋に暮らすだけでは不十分、狭い押し入れの中に閉じこもり、布団を積み重ねた中でとりとめもない妄想に耽る、などという経験は全くない。

回顧すべきは、もうとっくの昔になくなってしまった東大駒場の通称8号館図書室であって、そこには当時教養学部教養学科という、本郷ではなく駒場に研究室を置く、こじんまりとした学科のための専門書籍が置かれていた。開架式書庫で3階に分かれていたものの教室を改装した空間であったか

ら広いはずもなく、蔵書数も限られていたに違いない。とはいえ、そこに詰め込まれた外国語ばかりの書籍は専門課程に進もうとする学生を誘惑するには充分、本棚の脇には小さな机と椅子が用意され、貸し出しの手続きのために書庫から移動する前に、中身を確認できるようになっていた。その細やかな心遣いにわたしが、閉館まで便乗するようになるのにさして時間はかからなかった。もともと工学部や理学部に進学する学科の学生であったはずが突如、教養学科で科学史科学哲学を専攻するという方向転換を決断するにあたり、この「親密な」空間を学科進学が内定する二年後期から使用できることが決定的であったのは疑いない。

フランス留学中に研究の必要上、国立図書館や国立古文書館、いくつかの大学図書館に通い、そのそれぞれに懐かしい遭遇はあったが、克明に思い出せるとなると、大学街より一本入った路地にあった大変狭い古書店で、書架の上のほうの本を取るための梯子に腰かけて、そこにあった本を夢中になって読んだことで、呆れた店主から、明日も来るなら、あらかじめ下に用意してやる、危なっかしくて見ていられないと言われ、さすがにこちらも少々ばつが悪かったことか。その書店もすではない。とはいえ、書物と常に身体を接しつつ、そこに書き込まれた言葉がこちらに向けて何事かを囁いている場こそ、わたしにとって「いずこなりとこの世の外へ」最も開かれた空間であることに今も変わりはない。

●まつおか しんいちろう 本学准教授（フランス語）